週刊新潮
連載 1126

変見自在

高山正之

石破の善意

幣原喜重郎は「日本がなぜ戦争に踏み切ったか」から「なぜ負けたか」まですべてを検証する「戦争調査会」を昭和20年11月に立ち上げた。

欧米追随の軟弱者、幣原がどれほどの覚悟で始めたかは知らないが、それをやり遂げていれば名宰相と言われたかもしれない。

なぜならあの戦争は余りに多くの不実があった。つまり嘘が多かった。

検証が欠かせない理由はある。第一次大戦の折に米紙は独軍の残忍な振舞いを書き連ねた。

占領地ベルギーの産院を襲い、赤ん坊を放り上げて銃剣で刺した。看護婦を犯した。将来、銃を持てないよう子供たちの手首を切り落としたなどなど。

米富豪が手首を失った子供たちを引き取るというニュースもあって、ウッドロー・ウィルソンは第一次大戦に参戦を決めた。

しかし戦後、米富豪が手首のない子供たちを探しに行ったが、そんな子供は一人もいなかった。

英政治家ポンソンビーは一連の記事を検証し、産院の看護婦が犯された事実も放り上げられて刺された赤ん坊の話も何の根拠もないことを確かめた。

彼の『戦時の嘘』（1928年刊）は故意に歪められた報道で独が国際社会の憎まれ役に仕立てられていたと指摘し、参戦を望む米大統領が新聞界と結託して仕組んだ可能性も示唆した。

そんな昔話が決して他人ごとではないのは、日本も終戦後すぐに「日本軍はマニラ空爆下で10万人市民を強姦し虐殺した」とするGHQ発の残虐話を各紙に強制掲載させられたからだ。

ほかにもバターン死の行進だとか南京大虐殺とかが米国や支那から続々と湧いて出てきていた。

まともだったころの朝日新聞は「関係者もいる。検証しよう」と紙面で訴えた。

途端にGHQは2日間の発刊禁止を命じてきた。

幣原の戦争調査会はその意味で大いに期待されたが、発足して間もなく、マッカーサーが調査会を閉鎖するよう命じてきた。

すでに東京裁判も始まっている。「法廷で先の戦争が検証され、戦争犯罪が明らかになる」と。

しかし東京裁判では現場にいた兵士も知らない南京大虐殺はあったとされて松井石根が処刑された。

バターン死の行進も事実だとされ、本間雅晴が銃殺された。

空爆下で10万人市民が死んだのは日本軍による虐殺だったとするマニラ大虐殺も事実とされ、朝鮮人の洪思翊中将が処刑された。

これで先の戦争は検証済みとされた。それをいいことにジョン・ダワーは「日本軍は赤ん坊を放り上げて銃剣で刺した」という支那人の話を持ちだして、「検証しなくても十分の真実だ」と書いてピューリッツァー賞を貰った。

今は米国のポチになった朝日は「日本軍はもっと悪いことをした」と慰安婦の嘘を捏ね、支那人謹製の731部隊の嘘を光文社が売り物にもした。

そして戦後60年が経ったところで笹幸恵が「風邪気味だけどバターンを歩いてみました」という現場検証結果を文藝春秋誌上で報告した。

「死の行進なんてよく言う」が検証結果だが、こんな形で嘘がばれて米国務省はびっくりした。東京裁判の虚構が崩れてしまう。

その窮状を救ったのがユダヤ問題では泣く子も黙るサイモン・ウィーゼンタール・センターだった。

その後押しで結構な嘘つきで知られる元捕虜の一人が文春に反論した。

文春は腰が砕け、戦後初となる笹幸恵の検証を事実上葬る談話を載せた。

日本はまた検証放棄の時代に戻ってしまったが、ここにきてまさかの石破が「今こそ先の戦争の検証をしたい」と言い出した。

この人は愚かだから村山富市と同じに「日本は支那朝鮮で残虐の限りを尽くした」と本気で信じている嫌いがある。

検証すればもっとどぎつい80年談話を出せると思っての発言だろうが、瓢箪から駒だ。この際、本気で検証して真実を披瀝してもらおうではないか。